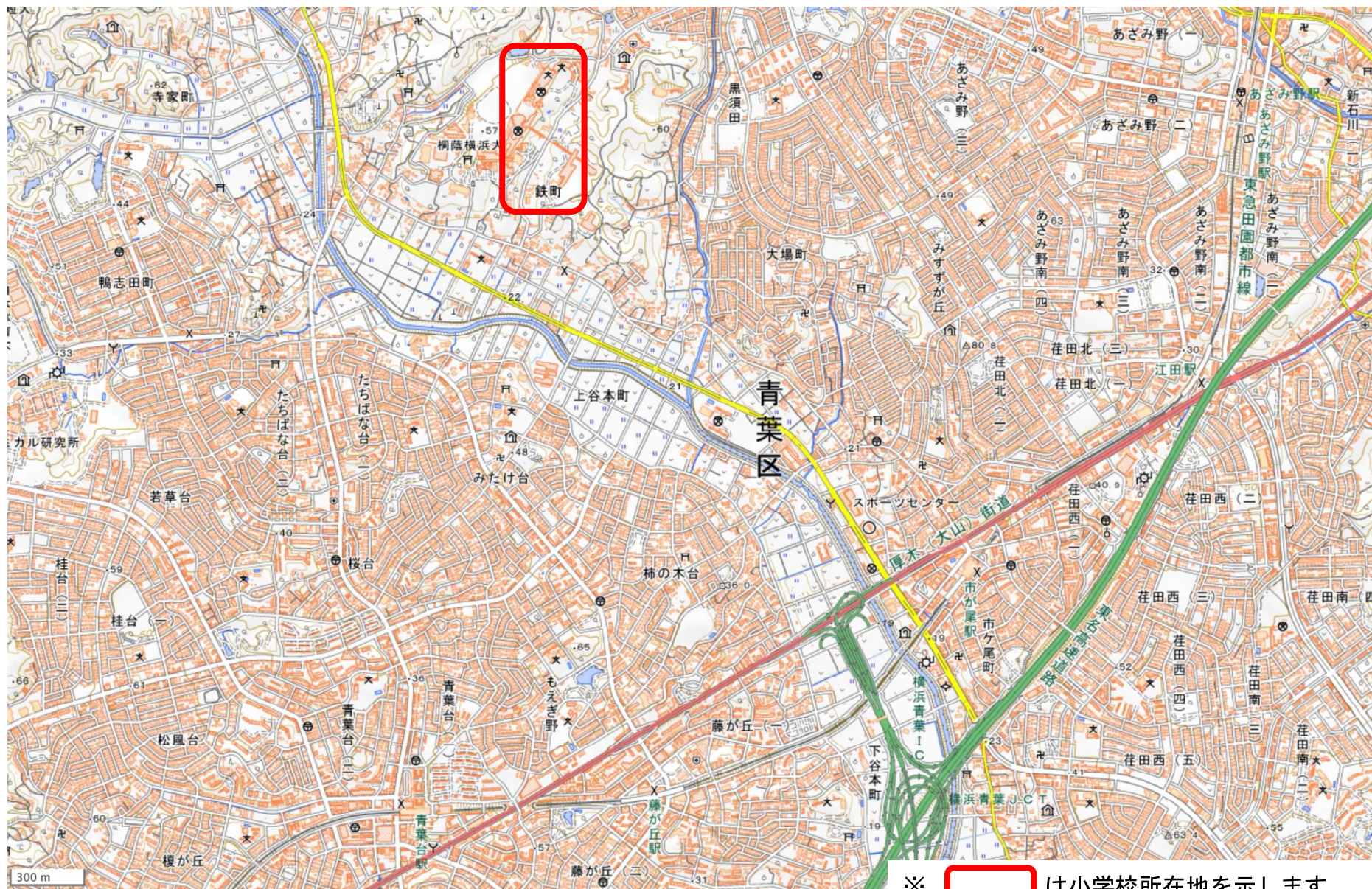


資料 1

地理院地図（廃校になった小学校所在地周辺の状況）



※ は小学校所在地を示します

資料 2 青葉区保育所等マップ 2024（廃校になった小学校所在地周辺の状況）

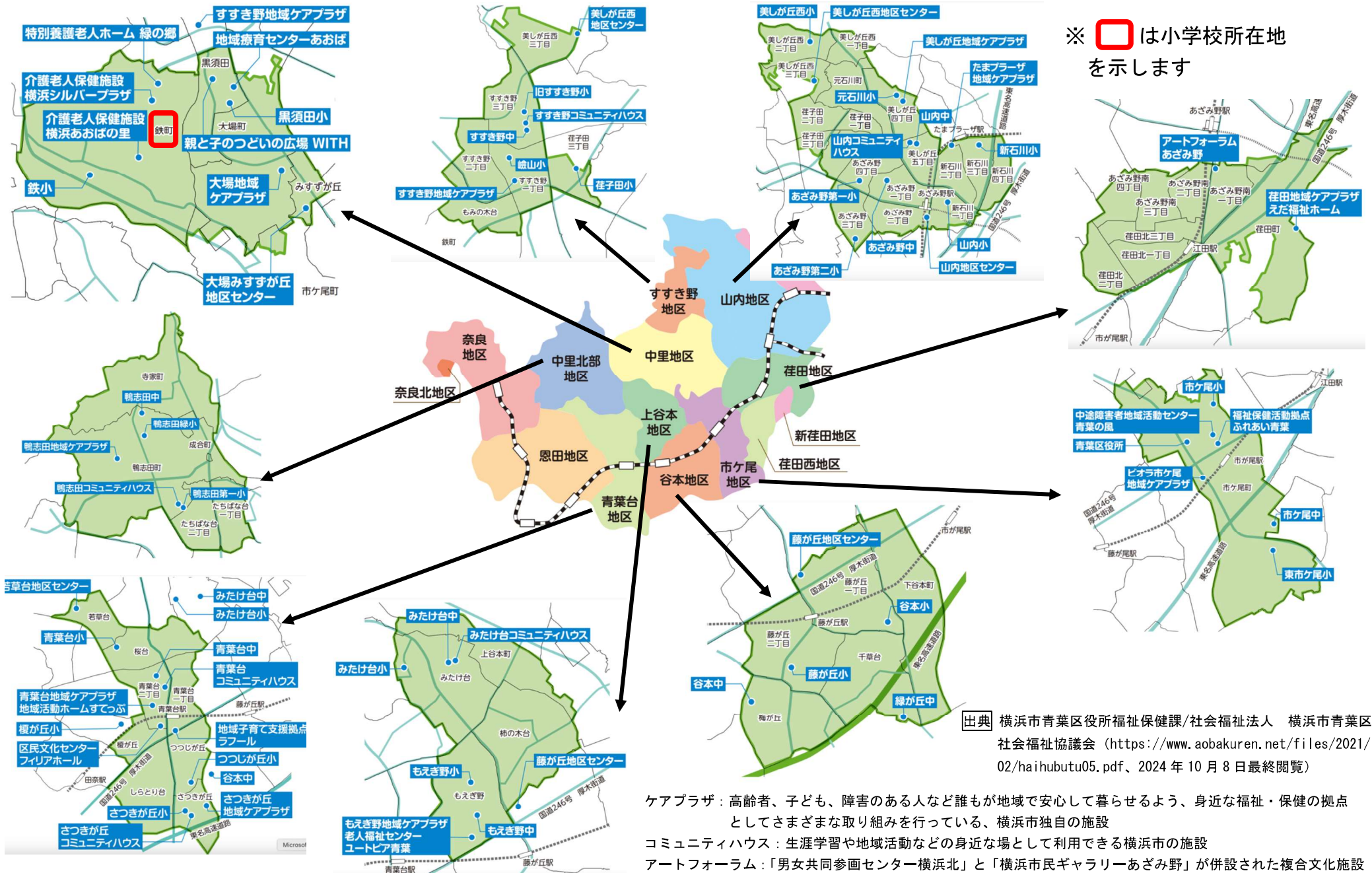


出典 横浜市青葉区子ども家庭支援課保育担当 (https://www.city.yokohama.lg.jp/aoba/kusei/koho/map_ichiran.files/0186_20240205.pdf、2024 年 10 月 7 日最終閲覧)

※ は小学校所在地を示します

資料 3

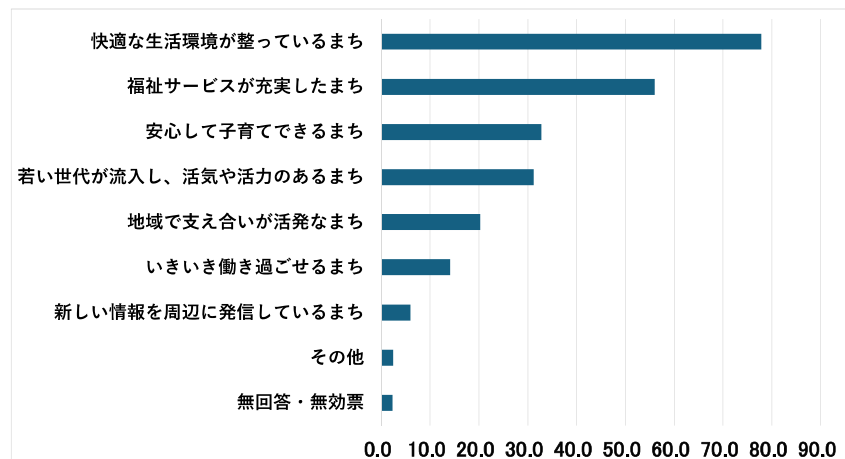
第 4 期青葉区地域福祉保健計画（廃校になった小学校所在地周辺の状況）



資料 4

意識調査『将来の青葉区のまち』『今後の横浜のまち』

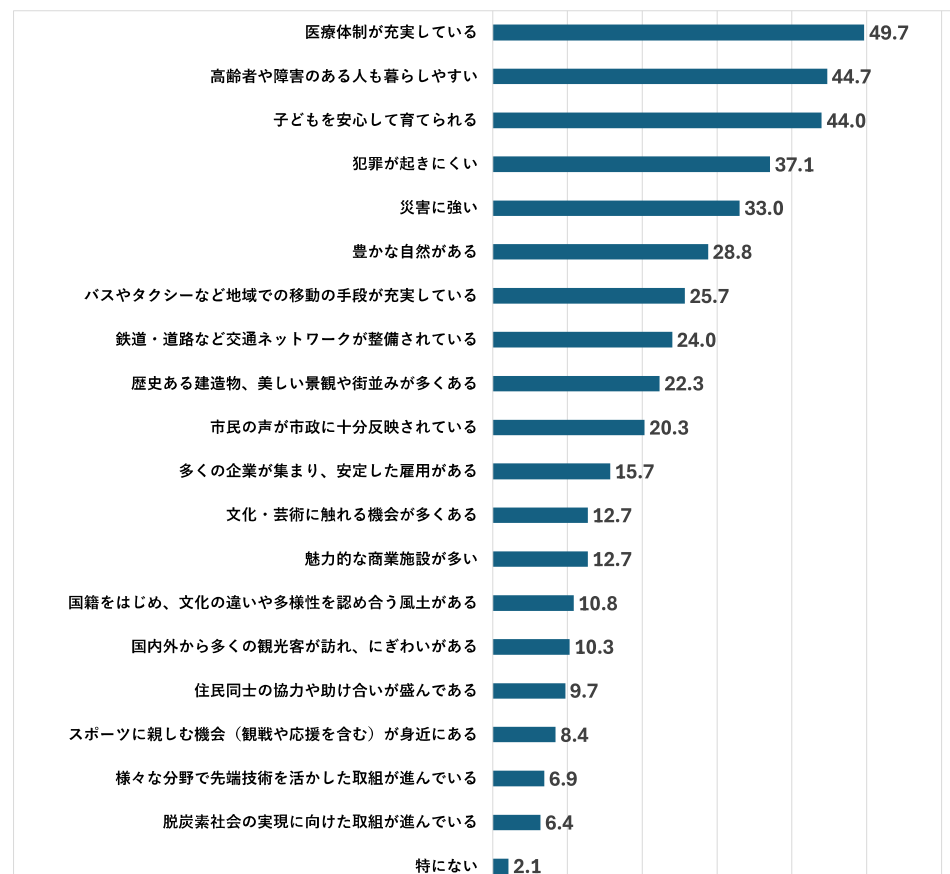
将来、青葉区がどのようなまちであってほしいと思いますか。



※複数回答式、回答数は 2,833、グラフの数値は %

出典 横浜市青葉区「令和4年度青葉区区民意識調査 調査結果報告書」(青葉区総務部
区政推進課企画調整係、2023 年、p.22)に基づいて作成

今後の横浜のまちについて、あなたはどのようなまちになるとよいと思いますか。



出典 横浜市「令和5年度横浜市民意識調査」(<https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/seisaku/torikumi/shien/shiminisiki/ishiki2023.files/r5hokokusyo.pdf>、p.104、2024 年 8 月 1 日最終閲覧)に基づいて作成

※複数回答式、回答数は 2,203、グラフの数値は %

資料 5

『新データで読む地域再生

「人が集まる県・市町村」はどこが違うのか』（書籍）

5-1

廃校活用

【2023年1月7日掲載】

廃校が変身、集客や起業に一役 山梨県は84%が現役、活用率トップ 北杜市、元体育館で雨天でもクライミング

公立学校の廃校、年に数百
活用率は全国で64%

廃校が集客施設や工場に生まれ変わっている。活用率が47都道府県で首位の山梨県では廃校を首都圏からの集客に生かしており、2位の熊本県では企業の誘致が目立つ。鉄筋コンクリートの校舎は解体に数千万円かかること

もあり、草刈りや警備に年数十万円から数百万円が要る。活用が欠かせず地域の個性を生かせば街の活力につながる。

文部科学省が2022年3月に公表した「廃校施設等活用状況実態調査」をもとに、日本経済新聞がアンケート調査をした。02〜20年度に廃校となった公立の小中学校や高校などのうち

首都圏近郊は廃校活用率が高い(2021年度)

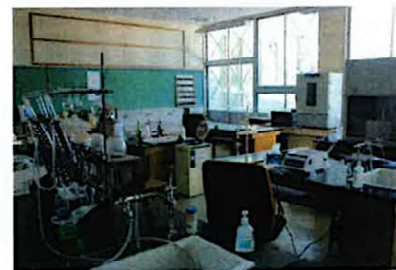
1 山梨県 84	17 兵庫県 68	33 山形県 62
2 熊本県 82	18 佐賀県 68	34 福岡県 61
3 栃木県 81	19 長崎県 67	35 福島県 61
4 鳥取県 81	20 宮崎県 67	36 徳島県 61
5 神奈川県 79	21 新潟県 66	37 鳥取県 60
6 沖縄県 78	22 茨城県 65	38 秋田県 60
7 岐阜県 76	23 鹿児島県 65	39 和歌山県 59
8 群馬県 75	24 京都府 64	40 千葉県 59
9 愛媛県 75	25 大阪府 64	41 静岡県 57
10 長野県 73	26 香川県 64	42 岡山県 57
11 埼玉県 72	27 奈良県 64	43 石川県 55
12 三重県 70	28 東京都 63	44 岩手県 54
13 富山県 70	29 福井県 63	45 宮城県 53
14 滋賀県 70	30 愛知県 63	46 北海道 52
15 広島県 69	31 大分県 62	47 青森県 45
16 高知県 68	32 山口県 62	(%)

(注) 日経調査、文部省統計に基づく。同じ値の場合は小数点以下で順位付け

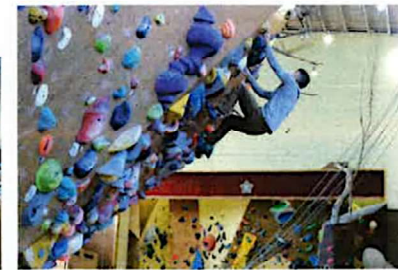
21年5月時点で再利用されている割合を活用率とした。人口減少や少子化「平成の大合併」も背景に廃校は00年代から増えた。最近も年数百の廃校が生まれ、活用率は全体で64%だ。

山梨県では廃校の84%が生かされており首都圏からの集客を見込んだ利用が多い。八ヶ岳山麓の北杜市では04年の町村合併の後、廃校になった小学校6校のうち5校の校舎が今も活躍中だ。市内の農業法人「ファーマン」は、その一つで教室を農作物の倉庫として使い、21年4月からは体育館でクライミング施設「ロクボク」を運営している。

ヒントになったのは、クライミングの聖地とされる市内の瑞穂山（みずがきやま）だ。全国からクライマーが集まるが、雨で断念となることも多い。そんな時の代わりの場所として愛好家でにぎわい、年700〜800人が訪れる。8割は県外からだ。地元の山岳ガイド、棚橋靖さんは「初心者からベテランまで楽しめる」と太鼓判を押す。

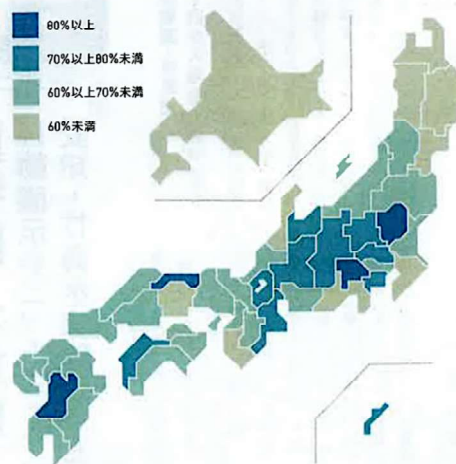


日本酒メーカー、美少年(熊本県菊池市)は理科室を成分など調べる分析室として活用する



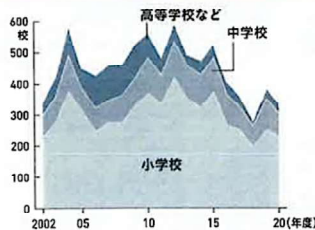
体育館を改装したクライミング施設「ロクボク」(山梨県北杜市)

首都圏近郊は廃校活用率が高い(2021年度)



(注) 日経調査、文部科学省統計に基づく

公立学校の年度別廃校発生数



ける必要もある。(中田英雄副市長からという。愛知県の課題である、車に次ぐ新しい産業を育てる場所として羽羽の矢が立った。

熊本県では小学校跡に酒蔵職員室に醸造用タンク

熊本県菊池市は湧き水が豊富で周辺には半導体関連や食品の工場も多い。税収や雇用を増やすため、廃校への企業誘致に力を入れた。

13年に廃校となった山間部の旧水源小学校は今や市内の日本酒メーカー、美少年の酒蔵だ。職員室は醸造所となりタンクが並び、アルコールの度数や成分を調べる部屋は理科室の雰囲気

残す。市では複数の行政機関にまたがる手続きの窓口を一本化して、土地の用途変更や改築に必要な書類、保健所への資料もまとめて用意して後押し。大型鳥エミューの牧場が市内の小学校跡で20年に開業した時も、飼育に必要な書類を提供した。

活用率の下位には北海道と東北が続く。名古屋大学の小松尚教授(建築計画学)は「人口が少ない地域でも農業に従事する世帯のために学校が造られたが、離農が進み廃校が増えた」と指摘する。人口減少は見込まれていたが対策が手つかずだった街は多く、コミュニティの核だった校舎を放置すれば地域の衰退を助長しかねない。自治体では跡地利用が決まっていな

い解体は公共事業の予算を確保しにくい。国は自治体と利用者を仲介、活用へ補助金を出している。

資料 6

温かい交流の場に（新聞記事）

ひと紀行

秋田に生きる

旧鮎川小学校



木造建築の懐かしいぬくもりが残る旧鮎川小学校

温かい交流の場に

コンサート開催／地域の味伝える

1954年に建てられ、木造建築の懐かしい面影を色濃く残す由利本荘市の旧鮎川小学校。2004年の閉校後も、コンサートや講演会、クリスマスイベントなど、さまざまな住民交流の場となっている。その魅力を守り、伝えようと励む人たちがいる。（松本 勉）

■活用を提案

東京の石油探鉱関連会社役員の小沢茂（61）（横浜市青葉区）は7年前、出張で旧由利町（現由利本荘市）を訪れた際、まだ閉校前だった校舎の横を偶然通りがかった。「まるで時が止まったようだった」。のどかな風景に溶け込んだ姿に目を奪われ、小学生の頃に通った木造校舎の記憶がよみがえった。

以後も出張のたびに校舎を訪れていたが、閉校になると「何となく活用できないか」との思いを募らせた。閉校となった後は、古い建物の保存法を相談するた

め建築士に協力を仰いだり、頭に浮かんだアイデアを町に申し出るなどして、保存・活用を訴え続けた。

2006年春、校舎の音楽教室に残されていたグランドピアノを利用し、手弁当でミニコンサートの開催にこぎ着けた。市も、水道や電気が使えるようにするなど、熱意に応えた。来場者は、同校OBも含めた地元の住民ら約50



小沢茂さん



木内美穂子さん

人。当時を思い出すように童謡や唱歌に聞き入る表情を見せた。この校舎は、住民の交

流の場になる」と手応えを感じた。

イベントはその後、講演会、シンポジウムと年を追って、規模を広げた。昨年末には、そばを走るローカル線・由利高原鉄道の通過に合わせてクリスマスイルミネーションを点灯させた。地元の住民も、自然と除草や清掃などに協力してくれるようになり、「交流の場」として定着していくのを実感した。

今年4月、校舎の保存と地域活性化に本格的に取り組むため、関係者約20人が集まって設立された「鮎川の風実行委員会」の会長に就いた。「学校と周りの自然は、この地域の宝。地元のみなさんと一緒に守っていききたい。あいさつで、これまでの活動を振り返りながら、そう述べた。

「鮎の風」の会員は、半年で60人ほどにまで増えた。離れて暮らしながら、すばらしい校舎にかかわれるのも、地元の協力があってこそ。今後にもその協力に依っていききたい」

■食事を提供

校舎から歩いて5分ほどの場所に住む農業の木内美穂子（60）は、校舎が中学校として使われていた1964年の卒

業生。里山のふもとにあり、豊かな自然に恵まれた校舎で学びながら、昼休みには近くで川魚を採り、放課後は裏の畑で桑を採って遊んだ。

約25畳の純和風の礼拝室では、足踏みミシンでブラウスなどを縫ったり、バレエボール部の合宿で仲間と泊まった一泊の思い出を語り合った。一番の思い出は掃除の時間。地元産の良質な木材で建てられた、重厚感あふれる校舎の床や窓を、同級生と一緒に磨くように磨いた。「自慢の学校がきれいになると思うと楽しかった。それだけに、校舎への愛着があるの」

廃校となった後は、毎日、そばを通るたびに「このまま使われないのは、もったいない」と胸を痛めていた。3年前、校舎がコンサート会場として使われているのを知り、自然と来場者におにぎりやみそ汁などを振る舞う活動に参加するようになった。

おにぎりは校舎のすぐ近くで収穫された米を使い、みそ汁や漬物には、自分で作った野菜や裏山で採れる山菜を使っている。「地元以外の参加者にも、この地域の味を知ってもらいたい」からだ。

地元の友人らとともに、敷地内の花壇に花を植えることも力を入れている。春はパンジー、夏はサルビアと、季節の花が思い出の校舎を彩る姿を楽しみながら、自宅で育てた花などを植えて替える。「これからますます美しい母校と地元の自然、味覚を伝えていきたい」（敬称略）